

点検者	防災太郎
所属機関	〇〇〇株式会社

表-5.6.3 安定度調査表(盛土)の記入例

施設管理番号	N	*	*	*	F	0	0	1	部分記号		
--------	---	---	---	---	---	---	---	---	------	--	--

【要因】(A)

要因	評価区分	盛土区分毎の配点										各要因の内の最高評価点
		片側 盛土部	面 盛土部	浮流・傾斜 横過部	平坦部	切盛 地部	盛土部	境界部	盛土部	境界部	盛土部	
変状	構造的なクラック・開口亀裂あり	2	②	2	2	2	2	2	2	2	2	
	のり面下部の劣化あり	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
	補修箇所多数あり	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	のり面の剥落あり	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
	該当なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	(3)
基礎地盤	地すべり・クレープ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	新設地盤	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
	崖錐	1	①	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	安定地盤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	(2)
	砂質土	1	①	1	1	1	1	1	1	1	1	
盛土材	基礎土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	構装土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	不明	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	(1)
	のり原部が湿潤	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
	盛土のり面に湧水あり	6	⑥	6	6	6	6	6	6	6	6	
地盤下土への影響	のり面・自然斜面に湧水あり	6	⑥	6	6	6	6	6	6	6	6	
	唐辺の土壌利用が湿潤	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	山側原部に側溝なし	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	
	側溝・排水溝が不十分	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	6
	該当なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	(6)
漂流の状況	漂流内に土(砂)石流・湧水あり	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
	上流側に崩壊地あり	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	常時湧水はないが・ガリーがある	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	排水工若くは排水工の屈曲・縮小あり	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	0
	該当なし	0	①	0	0	0	0	0	0	0	0	(3)
排水工の状況	排水工断面(φ、D)が不十分	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
	構設排水工・排水工加圧十分	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
	現水・高潮時に排水工が冠水	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
	のり原部が常時冠水(砂・砂礫土)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0
	該当なし	0	①	0	0	0	0	0	0	0	0	(2)
波河川の水影・影響	のり原が洪水・高潮時に冠水	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	洪水・高潮時に排水工が冠水	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	のり原部が常時冠水(砂・砂礫土)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0
	のり原部が常時冠水	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0
	該当なし	0	①	0	0	0	0	0	0	0	0	(2)
合計											(A)	10点

- 注1) ()は各項目の満点を示す。
 該当する場合は配点欄に○印をつけると共に点数を記入する。
 不明な場合は中間的な値を採用する。
- 注2) 切盛境部が漂流横過部に隣接する場合には漂流横過部の列を用いて評価する。
- * 印の項目は、漂流の現況の要因「常時流水はないがガリーがある」と判断された場合にのみ評価を行う。

【対策工】(B)=(A)+α				【履歴】(D)			
対策目的	得点区分	配点(α)	評価点	項目	評価区分	配点	評価点
変状対策	構造的な対策	(-4)	-4	被災	有り	(+30)	30
基礎地盤対策	その他・なし	±0	0	被災	なし	0	
基礎地盤対策	その他・なし	(±0)	0	盛土の全流出(通行止)	(+70)	70	
地下水・表面水の対策	地下水・排水工、アンカー付きのり格工、のり格工、表面被覆工、のり面排水工、養生張り工、側溝	(-3)	-3	盛土の一部流出、半壊(通行止)	+60		
漂流対策	その他・なし	(±0)	0	表面浸食(数日片側通行)	+45		
河川水・波浪対策	その他・なし	(±0)	0	軽微な損傷(即日通行可)	+40		
漂流対策	その他・なし	(±0)	0	盛土の全改修、十分な対策	(-70)		
漂流対策	その他・なし	(±0)	0	修繕程度、応急対策	-30		
漂流対策	その他・なし	(±0)	0	被災計と同様の対策、対策なし	0		
合計			(α)	合計		(D)	30点

※(A)が0点の場合対策工の効果補正は行わない

【評価点】(評価点の換算) (B)→(C)											
(B)	<0	0.1	2.3	4.5	6.7	8.9	10.11	12.13	14.15	>16	
(C)	0点	10点	20点	30点	40点	50点	60点	70点	80点	90点	

(E)=MAX(C, D)

要因からの評価点	(C)	20点
履歴からの評価点	(D)	30点
(C)と(D)の内、大きい方	(E)=MAX(C, D)	30点

盛土周辺の状況

対	応	判定
1	地山傾斜地で集水地形上に造成された盛土	
2	盛土のり原から測った盛土高が10m程度を上回る盛土	
3	盛土のり原近辺に民家や避難施設が存在する盛土	

横断排水管への集水地から流入する沢水の状態

対	応	判定
1	対策が必要と判断される。	
2	防災カルテを作成し対応する。	○
3	特に新たな対応を必要としない。	

表ー5. 7. 2 安定度調査表(擁壁)の記入例

施設管理番号	N	*	*	*	G	0	0	1	部分記号	
--------	---	---	---	---	---	---	---	---	------	--

点検者	防災太郎
所属機関	〇〇〇株式会社

〔擁壁周辺条件要因〕(A)

項目	要因	評点区分	配点	評点
地形	地すべり	地すべり地形ではない	(0)	0
		地すべり地形だが適切な対策を講じている	5	(30)
軟弱地盤		地すべり地形だが対策がない、あるいは不明	30	
		軟弱な地盤ではない	(0)	0
基礎地盤		軟弱な地盤だが適切な対策を講じている	5	(20)
		軟弱な地盤だが対策がない、あるいは不明	20	
基礎底面		良好な地盤に着床している	0	
		擁壁前面の基礎地盤の平場が狭い	5	
支持力		基礎地盤にある	(10)	10
		基礎地盤が30°以上傾斜している	10	(10)
地下水		平板載荷試験により支持力を確認している	0	
		N値から支持力を推定している	2	5
排水施設		支持力の確認を行っていない	(5)	(5)
		付近に湧水は認められない	(0)	0
立地		付近に湧水がある	10	(10)
		基礎地盤の地下水が底面付近にある	10	
洗阻		周辺に有効な排水施設があり、雨水等が流入しない	0	25
		周辺の排水施設が機能を発揮していない	(25)	(25)
洗阻		排水施設が設置されておらず、雨水が自然流入する	(25)	
		前面に河川がない	(0)	0
洗阻		洗阻防止工が無いが、基礎は常陸水位より高い	5	
		擁壁前面に有効な洗阻防止工が講じられている	5	0
洗阻		洗阻防止工がない	10	(20)
		擁壁前面の洗阻防止工の効果がない	20	
合 計			(A)	40 点
			但し50点を上限とする	

〔履歴〕(C)

項目	要因	評点区分	配点	評点
壁体の変状	変状なし	2年以上変状が進行していないことを確認	0	
		対策工事実施後変状の進行なし(2年未満)	10	
変状有		未対策だが変状の進行なし(2年未満)	10	50
		変状の停止が確認されず(含む、資料無し)	(50)	(50)
合 計			(C)	50 点
			但し50点を上限とする	

(D)=(A)+(B)+(C)

擁壁周辺条件要因による評点	(A)	40 点
擁壁本体要因による評点	(B)	10 点
履歴からの評点	(C)	50 点
合 計 評 点	(D)	100 点

〔総合評価〕

対 応	判 定
対策が必要と判断される。	○
防災カルテを作成し対応する。	
特に新たな対策を必要としない。	

注) ()は各項目の満点を示す。
該当する場合は配点欄に○印をつけると共に点数を記入する。
不明な場合は中間的な値を採用する。

〔擁壁本体要因〕(B)

項目	要因	評点区分	配点	評点
石積混合擁壁		安定した地山や切土のり面保護として用いている	5	
		良好な裏込めが施されている	5	10
無筋等片持梁式		上記以外	(10)	(20)
		空積	20	
片持梁式		点検要領参照	5	0
		点検要領参照	(0)	
合 計			(B)	10 点
			但し20点を上限とする	